

# 個別支援を必要とする生徒への支援

—ピア・サポートトレーニングプログラムを導入して—

川畑恵子

(奈良教育大学教育学部附属中学校)

池島徳大

(奈良教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程)

## A Case Study of the Classwide Peer Support Training Programs can have a major impact on a student who is apt to traunt in a Junior High School

Keiko KAWAHATA

(Junior High school attached to Nara University of Education)

Tokuhiro IKEJIMA

(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

**要旨：**人間関係形成能力の育成を図るために、A中学校B学級生徒全員にピア・サポートトレーニングプログラムの導入（全11セッション）を試みたところ、個別支援を必要とする不登校傾向の生徒に改善の兆しがみられ、学級生徒との人間関係が形成され不登校が改善された。

**キーワード：**ピア・サポートトレーニングプログラム Peer support training programs, 人間関係形成能力 The ability to make human relations, 不登校の回復 Recovery from the school refusal

### 1. 問題と目的

近年、人間関係を結ぶのが苦手な生徒たちが増えてきている。筆者の勤務校においても、相手の感情を押し量ることができず、不用意な言葉を発して相手との関係を崩してしまったり、過度に相手の言葉に反応して自信を失い、学校生活に不適応状態を示したりする生徒がみられる。

また、中学生という時期の特徴として、自他ともに自己開示することに不安感を抱く傾向がみられる。加えて、社会力の低下という人間関係の形成能力が育ちにくい社会的状況がある。このような状況にある中学生に、思いやりのある人間関係づくり、適度な距離を保った関係の取り方、相手の立場を押し量り、それに対する適切な対応の取り方を身につけるなど、人間関係形成能力を高める取り組みが必要であると考えられる。

人間関係の結び方を、体験活動を通して身につけさせる方法として、ピア・サポート（池島 2007）、構成的グループ・エンカウンター（国分 2006）やソーシャルスキル・トレーニング（佐藤 2006）、対人関係ゲーム（田上 2003）などが効果的であるということ

が研究で明らかになってきている。また、平成23年度から実施される中学校学習指導要領、「特別活動」の指導の在り方では、「学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」ことを目標としている。文科省（2010）の「生徒指導提要」にもピア・サポートの必要性が強調されている。

本研究で取りあげるピア・サポートは、同世代の仲間同士による支援活動を組織し、生徒の自然な援助資源を活かし、友人に援助の手を差しのべようとする活動である。支援する側・される側双方に、他者を思いやる気持ちを育み、生徒の向社会的行動（思いやり行動 pro-social behavior）の育成に役立つ。

ピア・サポートの主な支援内容は、①友達づくり活動、②相談活動、③もめごとなどの対立問題解消という3つに分類される。（Cowie & Sharp 1996）このような知見をもとに、生徒同士の人間関係形成能力を高めるプログラムとしてピア・サポートを学校教育に導入し、そのプログラムの開発とその効果の検討を研究

課題とした。

そこで、本研究では、生徒の人間関係形成能力の育成を図るために、学級生徒全員にピア・サポートトレーニングプログラムの導入（全11セッション）を試み、そのプログラムの効果、及び当該学級に所属する個別支援を必要とする不登校傾向の生徒に与えた影響等について検討していきたい。

## 2. ピア・サポートトレーニングプログラム導入事例の提示

### 2. 1. 対象学年及び人数

A中学校2年生B学級（38名：男子20名、女子18名）

### 2. 2. 実施者

教職歴30年の女性教員

### 2. 3. プログラム導入領域

国語の時間及び特別活動の時間、道徳の時間を相互に関連させて、全11セッションのプログラムを導入した。

### 2. 4. 各プログラムのねらい

- ①相手の話に反応しながら傾聴できる。
- ②相手の話に共感しながら傾聴できる。
- ③仲間の相談に入ることができる。
- ④対立解消の方法が分かる。
- ⑤獲得したスキルを使い、ピア・サポート活動に実際に活かすことができる。

### 2. 5. 各プログラムのねらい

実施期間は、X年6月から12月。

### 2. 6. ピア・サポートトレーニングプログラムの効果測定用具

- ①ピア・サポートトレーニングプログラムの導入によって、ねらいとするトレーニングが獲得されたのかをみるために、河村（2001）の「配慮のスキル14項目・関わりスキル10項目」（いずれも4件法）を、プログラムの導入前、導入中、導入後に当該学級生徒に実施。
- ②セッション終了後に、毎回「振り返りシート」を配付し、感じたことや気づいたことを書かせる。
- ③授業における満足度を可視化するために、5件法により評定させる。（#3以降実施）

### 2. 7. ピア・サポートトレーニングプログラムの導入方法

ピア・サポートプログラムの導入方法については、相川（1996）を参考に、「ウォーミングアップ」、「インストラクション」、「モデリング」、「リハーサル」、「フィードバック」の順序で実施することとした。

ウォーミングアップでは、緊張感を和らげ心を開いた状態にするために、ゲーム的な要素を取り入れたエクササイズを実施。リラックスした状態になるように雰囲気づくりを行った。

インストラクションでは、「FELORモデル」（Cole, T. 2002）を用いて、傾聴姿勢を常に意識させた。

モデリングでは教師と代表生徒によるロールプレイングを行い、身につけさせたいスキルを明確化し生徒の理解を促した。

表1 ピア・サポートトレーニングプログラム

#	月日	目的	内容
1	6/15	ガイダンス 聴くことの練習	・ノン・バーバルコミュニケーション ・言葉について考えよう 「ちくちく言葉とふわふわ言葉」
2	6/25	言葉について考える	・話すこと、聞くことの基本をマスターしよう
3	7/13	傾聴と共感	・上手な聴き方をマスターし、聴き方プロを目指そう
4	9/7	傾聴1	・「FELORモデル」で上手な聴き方を身につけよう
5	9/24	傾聴2	・2人組で「FELORモデル」を身につけて、聴き方プロを目指そう
6	9/30	傾聴3	・FELORモデルで確認しよう…4人1組で悩みを聴く
7	11/10	感情の受け止め	・積極的傾聴と感情の受け止め練習
8	12/3	問題解決	・よりよい問題解決の方法を考えよう
9	12/8	対立解消1	・AL'Sの法則をマスターし、対立解消の練習をしよう
10	12/10	対立解消2	・AL'Sの法則をマスターし、対立解消の練習をしよう ・実際の場面で解決できる力をつけよう
11	12/17	自己理解 振り返り	・学んだことを振り返ろう ・自分の変化を確かめよう

リハーサルでは、一定の時間、活動を行った後、スキルが定着するように、再度教師がスキルを確認し、再び活動を行うという手順を踏んだ。

フィードバックでは、振り返りシートを全セッション用意。各セッションでのポイントを明確化して5段階の評価を実施。また、気付いたこと、身に付いたことを書かせ、学習の振り返りを行った。

### 2. 8. 導入を試みた「ピア・サポートトレーニングプログラム」

表1に、導入を試みた全11回の「ピア・サポートプログラム」を示す。

たものと思われる。

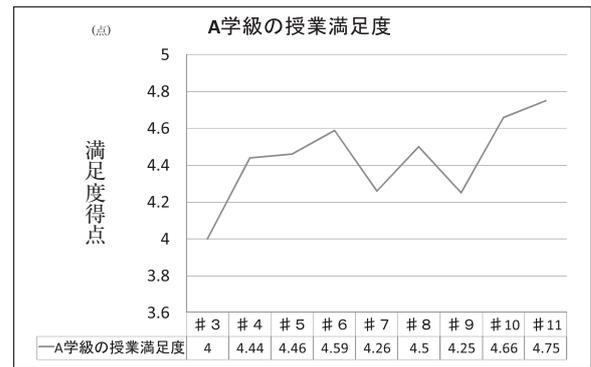


図2 A学級の授業満足度の変化

## 3. 結果

### 3. 1. ピア・サポートトレーニングプログラム導入前と導入後の変化

図1に、当該学級の「配慮のスキル」と「関わりのスキル」のピア・サポート導入前（4月）と導入中（10月）、導入後（12月）の変化を検討した。その結果、「配慮のスキル」(F(7,141)=14.283, p<.05)、「関わりのスキル」(F(8,106)=16.223, p<.05)の主効果が有意であった。測定時期を独立変数、各時点における得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った。多重比較にはBonferroni法を用いた。(p<.05)その結果、「配慮のスキル」は導入前-導入後に5%水準の有意差が見いだされ、導入前-導入中及び導入中-導入後にも

### 3. 3. ピア・サポートトレーニングプログラム導入による、個別支援を必要とする生徒の変化

C君は1年生の3学期から不登校傾向を示していた生徒であった。本プログラムのスキル学習を重ねていく中で、徐々に人との関わり方を身につけてきている。C君の「配慮のスキル」個別得点をみていると、導入前に、友達をほめたり励ましたりするのが苦手であったC君が、導入中テストで得点が増加し、人との関係能力に増加がみられる。特徴的なものを挙げると、「友だちが何かうまくしたとき、『じょうずだね』とほめていますか」の質問得点が、導入前の（1点）から導入中、導入後（ともに3点）に上昇している。また、「友だちが元気のないとき、はげましていますか」も、（1→3→3）と変化してきている。また、「関わりのスキル」では、人と関わるのが苦手だったが、友達を中心に遊んだりアイデアを出したり、意見を言ったりするなどの言動が増えてきている。特徴的なものを挙げると、「友だちの中心になって、何を遊ぶかアイデアを出していますか」が（1→3→3）に、「係の仕事をするとき、何をどうやったらよいか意見を言っていますか」が、（1→3→4）と大きく変化してきている。事実、C君は筆者が担当する教科の教科係として、責任を持って活動を行い、学級の生徒に伝達したり、話し合いの場面において意見を述べたりするなど、これまでにな言動がみられるようになってきている。導入後に実施された「配慮のスキル」「関わりのスキル」の自己評定では、(1)の評定は全く選択されていない。

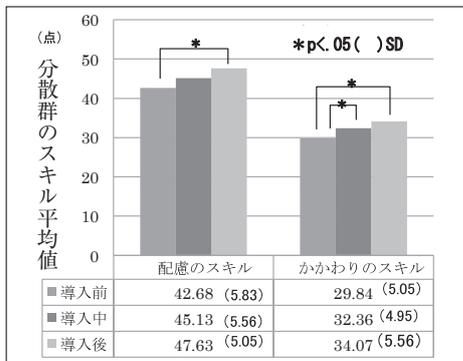


図1 配慮のスキルと関わりのスキルの変化 (n=38)

有意傾向が見られた。また、「関わりのスキル」は、導入前-導入中、導入前-導入後に5%水準の有意差が見い出され、ピア・サポートプログラム導入後にそれぞれのスキルが高まっていることが分かった。

### 3. 2. ピア・サポートトレーニングプログラムを取り入れた授業の満足度の変化

本実践においては、プログラム#3～11の授業後授業の満足度を計るために、5件法により自己評定させた。セッションが進むにつれて、満足度は増している。人の話の聴き方を学び、話を聴いてもらえる喜びを得

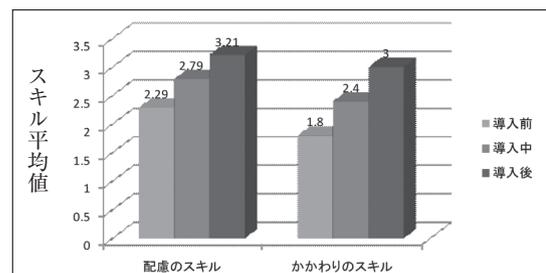


図3 C君の 配慮のスキルと関わりのスキル変化

#### 4. 全体的考察

##### 4. 1. 導入を試みたピア・サポートトレーニングプログラムについて

本研究で実施した人間関係形成能力を高めるピア・サポートトレーニングプログラムは、新たなスキルを開発する研究ではなく、従来のプログラムを生徒の実態に応じて組み合わせ、より効果的なプログラムの組み合わせを開発することであった。以下、本研究を通して、明らかになったことをまとめて述べる。

まず、ピア・サポートトレーニングプログラムに必要な不可欠な要素は、友達づくり活動、相談活動、対立問題解消であり、スキルの獲得もこの順番の手順で行うことが有効であるということが分かった。

友達づくり活動では、「リレーションづくり」「自己理解・他者理解」(森川 2004)の活動を導入した。ここでは、自己紹介・他者紹介のエクササイズを通じて、自己理解・他者理解を行った。加えて、言葉の持つ力にも着目させ、相手を元気づける言葉、傷つける言葉について考えさせ、他者理解を促進した。こうした活動を土台にして、次の段階のスキル獲得に相談活動を設定した。

相談活動においては、「かかわり技法」「傾聴技法」を定着させた。なぜならば、ピア・サポート活動に必要な不可欠なスキルは傾聴スキルであり、教師も身につけておかねばならないものである。それは、筆者自身、日常の教育実践のなかで強く実感しており、ピア・サポートについて研究を進める中でも、また職員研修のなかでも認識を新たにしている。ピア・サポート活動を行う生徒においても、傾聴スキルを定着させることによって相手に対する共感や受容の姿勢が生まれる。

対立問題解消については、「問題解決の技法(対立解消とメディエーション)」を習得させるため、「合意する」「聴き取る」「解決する」という手順を踏むことが必要である。まず、演習の台本に従って練習させ、解決の道筋が分かるようになってから、次に、実際の学校生活で生じる身近な問題についてロールプレイング法などで体験させた。生徒達は、実際の問題を解決する難しさを実感するとともに、やはり、この活動が最もやりがいのある活動であり、学校生活で実際に役立つことを実感した。

##### 4. 2. 個別支援を必要とする生徒への影響

学級全体へのピア・サポートトレーニングの導入は、個別支援を必要とするC君の学級適応に大きな影響を与えたものと思われる。現に、学級で友人関係をうまく育み、不登校傾向であった時期を脱して元気にできるまでに回復してきた。生徒同士の人間関係能力を高め、学級での居心地のよさを作り出し、学級が非常に和やかな雰囲気にも包まれるようになってきている。

折しも、当該学級に転校生を迎えることになったが、生徒たちは、これまでに学んだ人との関わり方や傾聴スキルなどを駆使して温かく転校生を迎えることができた。

#### 5. おわりに

生徒指導において、事態が悪化してからの対応ではかえって問題解決を難しくしてしまうことも少なくない。問題行動の未然防止、人間関係のよりよい関係を構築していく方向にシフトしていくことが何よりも求められる。

本研究で取りあげたピア・サポートトレーニングは、予防的・開発的生徒指導の視点にたち、子どもたち同士の人間関係を良質なものに転換し、また自分たちで問題解決を図ろうとする力を具体的に育成するものである。支援する側、支援される側双方に有益な利益をもたらす活動である。今回の実践研究で、不登校傾向の生徒が、級友との関わりの中かで対人関係の結び方などを学び、学級への帰属意識を高め、不登校を克服する結果となったことは何よりである。

今後、さらに、学校・学級の実態に合ったピア・サポートトレーニングプログラムの開発を行い、生徒自身によるピア・サポート活動がスムーズに展開できるよう支援策を講じていきたいと考えている。

#### 参考・引用文献

- Cole, T. 2002『ピア・サポート実践マニュアル』(川島書店)
- Cowie, H. & Sharp, S. 1996『学校でのピア・カウンセリング』(誠信書房)
- 池島徳大 1997『クラス担任によるいじめ解決への教育的支援』(日本教育新聞社)
- 池島徳大 2003「イギリスにおけるいじめ問題への取り組みとピア・サポート」(第2回日本ピア・サポート学会研究大会発表資料)
- 門脇厚司 1999『子どもの社会力』(岩波書店) 文部科学省 2010 生徒指導提要
- 国分康孝他編著 2006『構成的グループ・エンカウンターと教育分析』(誠信書房)
- 森川澄男 2004『ピア・サポート』(教育出版)
- 中野武房他編 2008『ピア・サポート実践ガイドブック』(ほんの森出版)
- 西山久子・山本力2002「実践的ピアサポート仲間支援活動の背景と動向-ピアサポート/仲間支援活動の起源から現在まで-」(岡山大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第2巻)
- 西海 巡・吉田ひろみ・太田三葉子2002「ピア・サポート、メンタルフレンド、学校教育相談の

統合的実践-教育地域科学部附属小中学校と教育  
総合実践センターの連携のもとで-」(鳥取大学教  
育地域科学部附属教育実践総合センター紀要  
第12号)

西海 巡 2003「紙上相談ピア・サポートにおける  
小中学校を見通したサポーター育成」(鳥取大学  
教育地域科学部附属教育実践総合センター紀要  
第13号)

佐藤修策監修 2007『学校カウンセリングの理論と実  
践』(ナカニシヤ出版)

佐藤正二・佐藤容子編 2006『学校におけるSST実践  
ガイド 子どもの対人スキル指導』(金剛出版)

田上不二夫 2003『対人関係ゲームによる仲間づくり』  
(金子書房)

竹内和雄 2008「小中連携ピア・サポート活動-中  
学生の自己有用感を高め、小学生が安心できる  
小中連携ピア・サポートプログラム-」(ピア・サ  
ポート研究 第5号)

山田日吉 2008「中学校におけるピア・サポートの  
展開-校長の学校経営の柱の一つとしての位置づ  
けと展開-」(ピア・サポート研究 第5号)